

巻頭言

上久保 達夫（皇學館大学文学部教授）

わが国の「海外帰国子女教育」研究の先鞭をつけられたひとり、当会の小島勝会長が、まへの当会会報巻頭首で「それらの教育問題が、日本の教育問題として取り上げられるようになってから30年になる」（『帰国子女教育を考える会』通信第4号、1997年5月）と述べておられる。当時の30年前とは1960年代後半のことで、私の大学入学前後の頃である。また、記録によると本会の発足は1990年11月とある。

私がそれらの教育問題、とりわけ海外子女教育問題とのかかわりのはじまりは、1988年に現地調査を実施した「シンガポール日本人学校」研究であった。「シンガポール日本人学校」を研究対象としたのは、たまたま当「日本人学校」の元派遣教員であった方との出会いがあったからで、その方のお誘いと同伴で当「日本人学校」を訪問することになった。そんなことで、研究動機も他人の勧めによる、半ば他律的なものであった。その後の海外日本人学校研究については、さきの本会第45回研究例会（2003年3月開催）で発表したとおりである。

その「シンガポール日本人学校」調査結果を「日本教育社会学会第41回大会」（1989年10月、創価大学）で発表した。その2年後に「台湾の日本人学校」調査結果を「日本教育社会学会第43回大会」（1991年10月、筑波大学）で発表したのを聞かれたかもしれない、大学学部の先輩でもある小島氏のお誘いで、暮れの12月の研究例会にお邪魔したのが、恐らく本会とのかかわりの最初であると思われる。第4代目の小島勝現会長就任時（1998年）には、監事をはじめとした役員や運営委員などの当会世話人人事が刷新され、私は新たに編集担当の運営委員として当会の裏方のお仕事を微力ながらも務めさせていただくことになって現在に至っている。

本会にまつわる思い出はいろいろあるが、そのなかでも一番は海外子女の現実に学ぶべく、現地へ足を運んでおこなった調査の共通体験ではなかっただろうか。中井明会員のお導きで、松下国際財団からの助成をうけた本会会員によるメンバー構成のマレーシア（1994）、中国（1995）、オーストラリア（1996）における海外子女教育調査の現地行は、暑いさなかの聞き取り調査であったり、せわしない移動の体験ではあったが、今となっては懐かしい貴重な思い出だ。

当時のメンバーのひとりであった馬淵仁氏は、それらの調査体験や結果も取り入れた論文をまとめ、最近、オーストラリア・メルボルンにある母校モナッシュ大学のPh.D.を取得された。さらに、その成果を1冊の本としても刊行された。また、そのメンバーの代表であり、本会会長の小島勝氏は異文化間教育学会創設以来のメンバーとして学会発展に寄与されてこられたが、本年度から学会6代目会長に選任されて、公私ともに多忙な日々を送っておられる。さきの馬淵氏や小島氏の大学の教え子で本会でも何かとお世話いただいている大学院生の出羽孝行君が、その事務局として学会運営を支えるキーパーソンとして育っている。

私は1998年以来、本会の会報編集担当として、年4回開催される本会研究例会の記録をテープにとり、テープ起こしをして会報に掲載してきた。しかし、学内事情ではあるが、古い大学の新設学科への移籍により、本会研究例会開催の土曜日が大学の授業開講日と重なったりして、研究例会への出席が実質上困難になってしまった。今年度でその新設学科の完成年度を迎えたが、学生の就職の件などの問題で、年4回の研究例会参加もままならないのが現状である。本会で果たせない私の不足を補ってあまりある貢献をしてもらっているのが、土肥豊氏である。彼は研究例会

の記録を毎回とり、文章化したものを会報に掲載しているのは皆様ご承知のことと思う。日下、私は彼の好意に甘えているのだが、本会の活動趣旨に賛同して裏方を支えていってくれるような若手の人材の発掘とリクルートは、本会存続発展には必要不可欠な急務の課題ではないだろうか。

ヒトの移動にかねてより関心があるので、私は日系移民の移住国ブラジルを来年夏に土肥氏らと訪問する予定である。移住国ブラジルの日系入社会の歴史や日系人の子弟教育などは、わが国海外子女教育のいわば原点ともいえるもので、現地日本人学校はもとより、日系入社会における日系人子弟の日本語教育の現状や動向をみてきたいと思っている。

最近の本会研究活動への感想を2、3述べて長くなった本文の終わりとする。本会会員の居住地や活動主体が主に京阪神地区であることから、それは全国的には近畿圏というローカルな地域での活動とみなされがちである。しかし、メンバーの人脈や人的ネットワークに負うところが大きいと思われるが、従来より首都圏(東京近辺)や海外(シンガポールなど)から講師としてお招きしたこともある。本年7月の第46回研究例会では、中部圏(名古屋市近辺)や海外のアメリカ(ロサンゼルスなど)からの参加者もあった。私が参加した分科会では、日韓両国の国際結婚カップルを両親に持ち、日韓両国での生育歴を持つ成人社会人女性の発表を聞いた。本人の意思とは関係なく異文化を生きてきた—若者女性の話として大変興味深く、内面頼もしくも思い、拍手を送りたい衝動にもかられて聞いた。これは異文化に育った子どもの光の部分にスポットが当てられたケースで、人間として励まされる思いがした。あいにく出席できなかったが、本年9月の第47回研究例会は「帰国子女の不適応とその克服」で、事例を通した紹介があって帰国子女の不適応問題が検討されたそうである。出席していないので詳細は分からないが、これも「帰国子女教育」問題として避けては通れない、重くて深刻なテーマである。人間の闇の世界といった語弊があるかもしれないが、それを克服したということは明と暗の世界を経験したということだろう。そんな明暗の世界をわれわれは同時代の人間として共有すべきではないだろうか。そんな世界の存在を問題意識として共有するところから、本会の研究活動も出発すべきだし、本会の結束と求心力も生まれてくるように思える。